社会（地域・福祉・企業の連携システム）が支える、学校教育終了後から生涯にわたる継続的な学びの実践研究事業

～コミュニケーション経験を基盤とする生活・就労支援プログラムの構築～

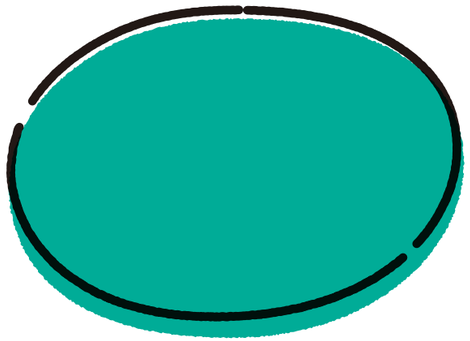
報告書

Cho-

超

18 OVER

NPO法人障がい児・者の学びを保障する会



社会（地域・福祉・企業の連携システム）が支える、
学校教育終了後から生涯にわたる継続的な学びの実践研究事業
～コミュニケーション経験を基盤とする生活・就労支援プログラムの構築～
報　告　書

超 cho-

NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会

1 ・・・・・・・・・・ もくじ
2 ・・・・・・・・・・ 事業のねらい
4 ・・・・・・・・・・ 事業概要
6 ・・・・・・・・・・「学び」ってなんだ？
7 ・・・・・・・・・・「コミュニケーション」ってなんだ？
8 ・・・・・・・・・・ 事業実施カレンダー

10 ・・・・・・・・・ プログラム
11 ・・・・・・・・・・・プログラム概要
12 ・・・・・・・・・・・CLOSED 3 ／しごとの意義
14 ・・・・・・・・・・・CLOSED 4 ／生活をつくる
16 ・・・・・・・・・・・CLOSED 5 ／人間・性と生
18 ・・・・・・・・・・・OPEN 2 ／文化・教養
OPEN 3 ／栄養と健康管理
20 ・・・・・・・・・・・OPEN 5 ／地域活動・社会参加
CLOSED 2 ／自主活動
21 ・・・・・・・・・・・OPEN 1 ／からだと表現
OPEN 4 ／防犯・防災
22 ・・・・・・・・・・・参加者のことば
24 ・・・・・・・・・・・プログラム実施後の気づき

25 ・・・・・・・・・ ワーキンググループ・成果報告会
26 ・・・・・・・・・・・ワーキンググループ
28 ・・・・・・・・・・・成果報告会
29 ・・・・・・・・・・・今後の展望
30 ・・・・・・・・・・・コラム
「もっと知りたい！」から始まる学び
32 ・・・・・・・・・・・おわりに

35 ・・・・・・・・・ 団体紹介

ねらい

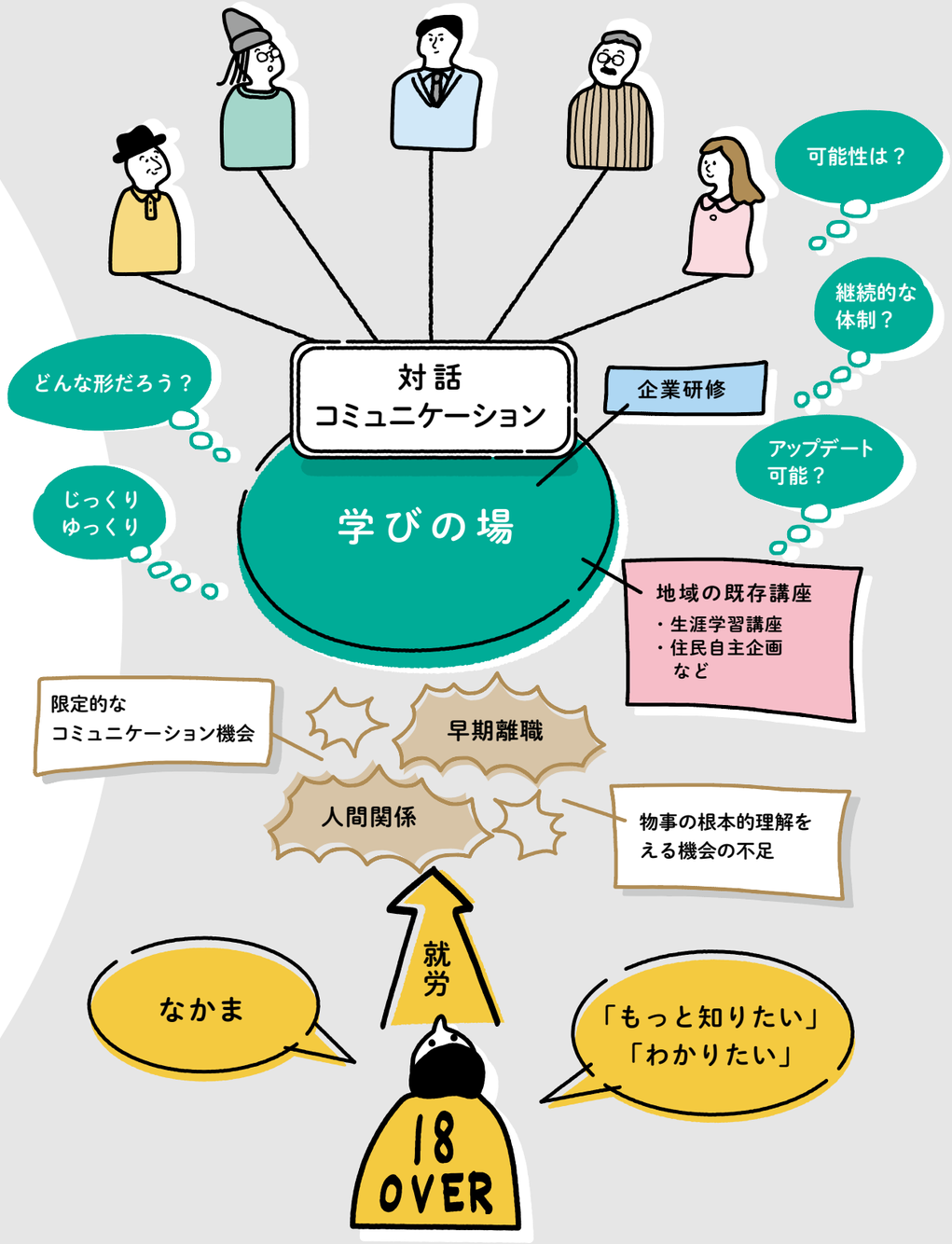
学び×コミュニケーション

平成 30 年度「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」（文部科学省）の委託を受け、今年度から当団体が実施した「社会（地域・福祉・企業の連携システム）が支える、学校教育終了後から生涯にわたる継続的な学びの実践研究事業 ～コミュニケーション経験を基盤とする生活・就労支援プログラムの構築～」は、高校・高等部卒業後の軽度知的障がい者を対象とした学びのプログラムの開発と、継続的な体制づくりを目的としています。

当団体の前身である「ままのがっこ」が東京都内の特例子会社を対象として独自に行った障がい者雇用に関するアンケート結果によると、就労中のトラブルや離職の原因として、“仕事の意義”、“お金に関する理解”など物事の根本的な理解の不足や、人間関係に関する意見が多く聞かれました。そうした現場の声を元にテーマを設定しながらも、一方的にそれに即した知識や教養を与えるのではなく、対話やディスカッションを用いて当事者の思いや考え方に寄り添うことで、当事者の学びのニーズを引き出し、それに応えるようなプログラムづくりに注力しました。

一方で私たちは、日常的な社会生活における彼らのコミュニケーション機会の少なさにも着目しています。社会に出てから人の学びの多くは偶発的なコミュニケーションから生まれています。そうした学びは、学校教育の機会からだけではなく、また家族や友人だけでもなく、日常の営みを送る上で偶然出会う様々な人や、そうした人たちとのコミュニケーション、その状況の中からいつの間にか得ていることがほとんどです。
障がい者の無作為な人たちとのコミュニケーション機会は、健常者の生活と較べた場合、圧倒的に少なく、それは自然発生的に経験する学びの少なさに直結していると私たちは考え、そのことを念頭に置いて新たな学びの場のあり方を検討してきました。

こうした学びの機会をより継続的に創出、実施していくひとつの方法として、自治体による生涯学習や共生社会実現に向けた取り組み、企業の障がい者雇用の安定化に向けた取り組みに、福祉支援や障がい理解促進、権利保障といった福祉業界の視点を掛け合わせていくことを考えました。当事者性を重要視する様々な分野の専門家によって組織したワーキンググループにおいて、プログラムの検証とともに、継続可能な実施体制を見出す方法、そして自然発生的なコミュニケーションが生まれる学びとはどのようなものか議論を重ねました。



事 業 概 要

当事業では彼らの生活と就労に関わる学びの機会拡充に対して、
以下のような事業構成を組み立てました。

OPEN と CLOSED にわかれた プログラム

彼らの生活や就労におけるニーズに沿ったテーマを設定し参加者を絞った CLOSED と、
一般参加を促し人との交わりの中で起こるコミュニケーションが下敷きにされた OPEN の
2 パターンにて構成。

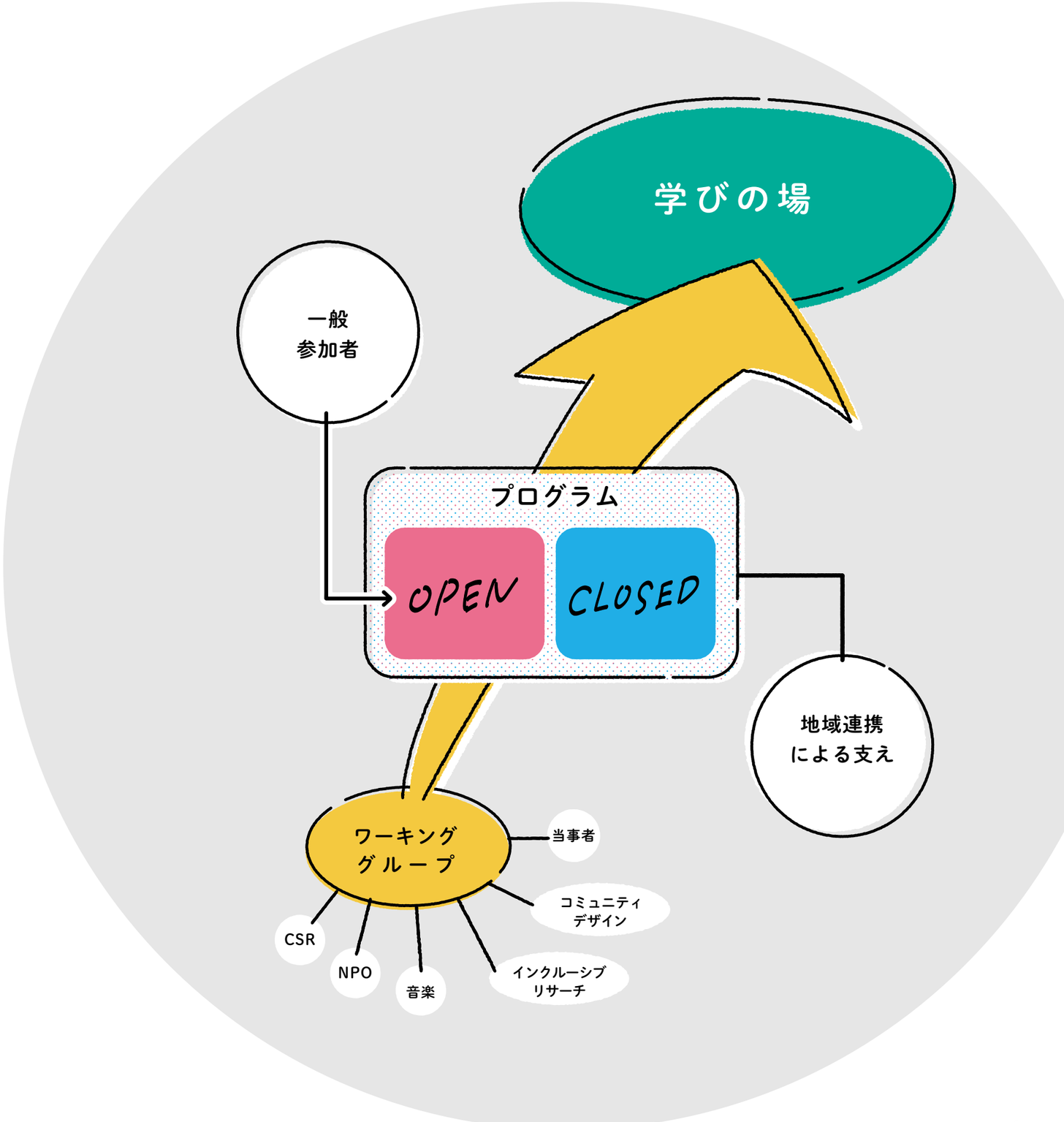
プログラムの 検 証
～コミュニケーションと学びの相互作用～

プログラムの検証を軸として、当事者性に重きを置く様々な分野の専門家を招聘した
ワーキンググループを組織。
より多様な人と共に議論を進める方向性が示され、第 2 回からは企業就労している方、施設で働く方、
高校生など当事者の参加を積極的に呼び掛けました。
また、地域内外の連携先を探る意味合いも含め、地域で活動する方、施設職員、研究者など、
誰であれテーマに関心を持つ人たちに対して開かれた会議の場となるよう進行しました。

地域・福祉・企業の連携による 支える仕組み

地域で提供されている既存講座との連携や、企業研修の場としての連携など、
プログラム実施を支える様々な仕組みづくりの可能性を探る連携協議会の立ち上げ。

※当事業が目指す学びの場の形にまだ不明瞭さが強いということもあり、ワーキンググループ内での検討を先とし、組織の立ち上げは先送りとしました。それに伴い連絡先やつながり方、展開イメージの検討も、ワーキンググループ内での検討事項と位置づけ直しました。



学び ってなんだ？

自分なりに感じること
自分なりにやってみること
自分なりにわかること

大森梓
NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会代表理事

「あ、そうなんだ！」とこころとあたまが揺さぶられ、「これ知りたかったんだ！」「どうして？もっと知りたい！」と思える出会い。そう思える自分が愛おしくなるいとなみ。信頼できる仲間や支援者を意識した場であること

永田三枝子
NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会理事

「学ぶ」とは、自分自身が変わったことを実感として分かること。分かる実感を言語化・表現するために、仲間とともに学習・追体験する営みを「学び」と呼びたい

栗林満
NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会理事

他者との違いを知ること、違いの理由を考えることが、学びだと思います。あれ？という違和感とか、どうしてそうなっているの？という疑問が、ちょっぴり新しい自分を見つける入口です。自分もみんなも先生、かな

坂本文武《ワーキンググループメンバー》
一般社団法人 Medical Studio 代表理事

主体的・能動的であるべきもの。真似して技術を習得したり、様々な経験をして知識を得たり、世の中の常識や普通を疑ったり、答えのないものの答えを探したり。より豊かな自分らしい生活を送るために必要な、考える、想像する、判断するといった力を育むための手段

田中真宏《ワーキンググループメンバー》
NPO 法人ピープルデザイン研究所

ハッとして、ワクワクすること

森口弘美《ワーキンググループメンバー》
京都府立大学公共政策学部福祉社会学科実習助教、
ケアの文化研究所主宰

自分が、大なり小なり、書き換わること。「そうだったのかぁ〜」と感じること

片岡祐介《ワーキンググループメンバー》
音楽家

「学び」とは生きるエネルギー。
以下はある教え子の詩

雨にも負けず／風にも負けず／
（中略）／今わからないことを分かり／
知らないことを知って／今よりもっと
強くなって／どんな人にもやさしくし
てあげる／そういう者に私はなりたい

永野祐子
NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会理事

生きることは学ぶこと。自分をとりまく環境やいろいろな人と関わり、そのなかで感じ考える自分自身に出会いながら生きることが、私たちをはぐくみゆたかにしています。このような関わりや出会いを経験するところに学びの原点があると思います

森博俊
NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会顧問、
都留文科大学名誉教授

思いがけず出会ったことから得て、いつのまにか自分の一部になるもの。
教わるよりは、“自分でやる”を続けると得やすくなる

鈴木一郎太
《ワーキンググループメンバー》
株式会社 大と小とレフ 取締役

コミュニケーション ってなんだ？

私たちは環境や他者、自分自身と関わりながら生きています。でもその関わりは一方通行ではなく、相互に応答しあう活動的な交わりです。ここからコミュニケーションがうまれ、学びが拡がるのではないでしょうか

森博俊
NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会顧問、
都留文科大学名誉教授

知らないことに気づき、知りたいと思う気持ちからくる言葉のやりとり、でしょうか。知ってびっくりしたり、ほっこりしたり、時にがっかりします。
私たちはそうして次なる知的野望を生きがいにするのかもしれません

坂本文武《ワーキンググループメンバー》
一般社団法人 Medical Studio 代表理事

「この人と繋がりたい」「知りたい・伝えたい」と思うこと、「ねばならない」からフリーでいること、がスタートでありベース。
ことばだけに頼らない

永田三枝子
NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会理事

ココロが動かされる、
ヒトやモノとのかかわり

大森梓
NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会代表理事

「コミュニケーション」とは人間関係のこと。ことばがあってもことばで話せなくても、コミュニケーション障害と言われても、人間は人間関係を切望している生き物と思います。
さらに触れ合うことも大切なコミュニケーションと考えます

永野祐子
NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会理事

話す・聞く・見る・動く・書く・打つ・感じる等々、方法は人それぞれで自由だけれど、一方通行ではない相互通行の、心の通じ合い。自分の考えや思いを一方的に伝えるだけでなく、自ら心を開き、相手の立場を想像し、尊重して、寄り添うことではじめて生まれるもの

田中真宏《ワーキンググループメンバー》
NPO 法人ピープルデザイン研究所

継続した共通の活動や安心できる居場所の中で、他者の存在や意図に気づき、同時に自分の変化に気づく過程でのことばや感情の交流。ことばや感情の交流が、自己肯定感や多様性の承認、仲間意識の形成につながるかどうかが、「コミュニケーション」の質として問われる

栗林満
NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会理事

黙っていても勝手にはじまるやっかいなもの。
例えば、黙っているだけでも、、“あいさつしない”と誰かが受け取ると勝手にはじまってしまう。
結果的にいい・わるい、どっちも起こる

鈴木一郎太《ワーキンググループメンバー》
株式会社 大と小とレフ 取締役

他者を積極的に誤解していくこと。その誤解を書き換え続けること

片岡祐介
《ワーキンググループメンバー》
音楽家

「え？」と思ったり、
「あぁ！」となったりすること

森口弘美《ワーキンググループメンバー》
京都府立大学公共政策学部福祉社会学科実習助教、
ケアの文化研究所主宰

事業実施カレンダー

8月		
18日㊏	オリエンテーション	CLOSED 1
23日㊍	生活をつくる ❶	CLOSED 4
24日㊎	生活をつくる ❷	
25日㊏	生活をつくる ❸	
9月		
8日㊏	からだと表現 ❶ ～ゆるゆる体操～	OPEN 1
9日㊐	しごとの意義 ❶	CLOSED 3
23日㊐	地域活動・社会参加 ❶ ～選挙に行くって そういうことか！～	OPEN 5
23日㊐	しごとの意義 ❷	CLOSED 3

10月		
6日㊏	栄養と健康管理 ❶ ～だれでもいつでも ちゃんとごはん～	OPEN 3
6日㊏	しごとの意義 ❸	CLOSED 3
15日㊊	ワーキンググループ ❶	
21日㊐	文化・教養 ❶ ～科学実験教室～	OPEN 2
11月		
3日㊏	自主活動 ❶	CLOSED 2
4日㊐	自主活動 ❷	
24日㊏	人間・性と生 ❶	CLOSED 5
25日㊐	人間・性と生 ❷	
29日㊍	ワーキンググループ ❷	

12月		
8日㊏	防犯・防災 ～災害から守ろう 大切な命～	OPEN 4
9日㊐	栄養と健康管理 ❷ ～みんなで考えよう 健康的な食生活～	OPEN 3
16日㊐	人間・性と生 ❸	CLOSED 5
23日㊐	からだと表現 ❷ ～はじけるリズム～	OPEN 1
23日㊐	クリスマス会	CLOSED 1
2019 1月		
13日㊐	文化・教養 ❷ ～ 韓国語教室 ～	OPEN 2
16日㊌	ワーキンググループ ❸	

26日㊏	からだと表現 ❸ ～パントマイムで お話しよう～	OPEN 1
26日㊏	地域活動・社会参加 ❷ ～ボランティア スタッフ体験～	OPEN 5
2月		
2日㊏	地域活動・社会参加 ❸ ～ボランティア スタッフ体験～	OPEN 5
5日㊋	ワーキンググループ ❹	
24日㊐	修了式	CLOSED 1
26日㊋	成果報告会	

プログラム

CLOSED OPEN

プログラム概要

10 のテーマは、現場や日常での彼らとのかかわりを通して、わたしたちなりに彼らの立場に立ち、彼らの生きづらさを緩和できるであろうという視点のもと構成しました。「知りたい」「やってみたい」という気持ちが自然と湧き出てくるよう、心を揺れ動かすエッセンスをふくんだ構成としています。

「あれ？」と感じることが入口となって、やってみたり、さぐったりしていく。感じたままに、とにかくやってみるという経験を通して、自分なりの理解がみちびき出されるような学びをこころざしています。

彼らの発する言葉や文字だけでなく、表情や態度、はたまた同じ場所にいること自体もコミュニケーションであり、表現（意思表示）が含まれているととらえ、プログラムとコミュニケーションが相互に影響し合うよう気にかけました。だれもが自分が感じたままに発言することができる安心感につつまれた環境の中で、自分が他者から尊重され、そして自分にも他者を尊重する気持ちが自然と芽生える。そうした場をつくることが学びの土台としてひつようだと考えています。

	実施日	タイトル	講　師
CLOSED 1	8月18日㈯	オリエンテーション	
	12月23日㈰	クリスマス会	
	2月24日㈰	修了式	
CLOSED 2	11月3日㈯	自主活動❶	
	11月4日㈰	自主活動❷	
CLOSED 3	9月9日㈰	しごとの意義❶	
	9月23日㈰	しごとの意義❷	
	10月6日㈯	しごとの意義❸	岩本洋二 読売教育 ネットワーク記者
CLOSED 4	8月23日㈭	生活をつくる❶	
	8月24日㈮	生活をつくる❷	
	8月25日㈯	生活をつくる❸	
CLOSED 5	11月24日㈯	人間・性と生❶	日暮かをる “人間と性” 教育研究協議会／ 障がい児・者サークル
	11月25日㈰	人間・性と生❷	
	12月16日㈰	人間・性と生❸	

	実施日	タイトル	講　師
OPEN 1	9月8日㈯	からだと表現❶ ～ゆるゆる体操～	瀬戸嶋充 人間と演劇研究所
	12月23日㈰	からだと表現❷ ～はじけるリズム～	大嶽實穂 打楽器奏者
	1月26日㈯	からだと表現❸ ～パントマイムで お話ししよう～	金子しんぺい パントマイムの お兄さん
OPEN 2	10月21日㈰	文化・教養❶ ～科学実験教室～	小沢洋一 あなたの 社会福祉事務所 ～アゴラへ
	1月13日㈰	文化・教養❷ ～韓国語教室～	朴恵貞 パクヘジョン 韓国語教室
OPEN 3	10月6日㈯	栄養と健康管理❶ ～だれでもいつでも ちゃんとごはん～	練馬区 健康推進課
	12月9日㈰	栄養と健康管理❷ ～みんなで考えよう 健康的な食生活～	
OPEN 4	12月8日㈯	防犯・防災 ～災害から守ろう 大切な命～	練馬区 危機管理室 防災学習センター
OPEN 5	9月23日㈰	地域活動・社会参加❶ ～選挙に行くって そういうことか！～	練馬区 選挙管理委員会
	1月26日㈯	地域活動・社会参加❷ ～ボランティア スタッフ体験～	練馬区 協働推進課 ＋ 地域おこし プロジェクト メンバー
	2月2日㈯	地域活動・社会参加❸ ～ボランティア スタッフ体験～	

CLOSED 3

しごとの意義

ねらい

しごとと生活やあそびの切り離しを考えるきっかけとなるよう、はたらくことの意味や、地域で長くはたらきつづけるための仕組みなどについて考える。
なかまづくりの意味合いもふくめ、それぞれが自分の言葉で話し、考えることを大切にする。

テーマを決める時にかんがえたこと

しごとのための能力や技術は、「はたらくこと」に対する理解や納得と一緒になることでより力を発揮するし、しごとをつづける力にもなる。そのため、実感のある学びにじっくりとした時間がひつような人が多くいる。

内容

❶ 9月9日／❷ 9月23日

・自己紹介
「しごとのイメージ」をさぐる時間
「何を言ってもいい」「人の発言をバカにしない」ことを前提とし、安心して意見をだせ、感想をもって、考えられることを大事にした
・知っているしごとや、イメージできるしごとを書き出す
・表の上に貼り出すことで見やすくし、意見や感想をこうかん
・しごとについている参加者に、今のしごとについて語ってもらう

❸ 10月6日

ゲスト：岩本洋二（読売ネットワーク記者）
・新聞記者にインタビュー
・参加者の中から司会役やきろく役を立て、記者のしごとについてインタビュー
・自分たちの関心事や問題意識をぶつけてみる

参加者のコメント

「今働いている環境はとてもいいのですが、静かな、少人数で軽作業が自分に向いていると感じたり、思えた。一緒に働いている人と少しでも多くの時間話す」

「みんなの話が聞けてよかった」

「しごとの質問を楽しむことができてよかった」

「特に興味をもった話（３つ）」
「孤独より孤高」 無理な人とは付き合はせずに、かつ自分に信念を持って人と向き合う事が、うまく生きていくコツ。
「自分の限界を決めない」
「メモは本書きをする」 メモはそのままにしておかず、メモした内容を覚えているうちに他のものに書きうつす。

「個人的には記者さんがカープファンだと知ってうれしかった」

「自分的には勉強になった。インタビューするのは生まれてはじめてやったから、そういうことをもっと世の中に広げていきたい。一人の人間として見てくれている。職場の人とちがう」

スタッフのコメント

「どんなしごとをしたいですか？」への答えが少なかった。
回答例 「自分ができるしごと」、「軽作業・資源回収」、「飲食店」、「人と関わる仕事」、「たこ焼き・今川焼・お好み焼き」

当事者が司会役をやったことで、意見が出しやすかったようす。

オリエンテーションでのお知らせのとき、「しごとの意義」というタイトルに抵抗感を示していた。「また学校でやっていることをやらされるのか」という不快感かもしれない。

すでにしごとをしている人たちと高校生では、「しごとの意義」の受け止め方に大きな差があり、高校生にとっては、難しい課題であった。

CLOSED 4

生活をつくる

≫≫ ねらい

話し合いやじゅんびに時間をかけ、指示や支援をへらした主体的な活動とすることで達成感や共感が生まれることを促し、生活をつくるイメージがそれぞれの中につくり出されるよう心がける

≫≫ テーマを決める時にかんがえたこと

「生活」はすべてのきばんとなる
ふだん話し合いやじゅんびに時間がかけられないことが多いため、主体的な意欲がない状態でプログラムを受けることになり、学びにつながりにくい

≫≫ 内 容

❶ 8月23日

・自己紹介
・「生活って何？」をテーマに自由に話し合う
・生活の中の行動から、今回取り組むことを決める
　→買い物、調理

❷ 8月24日

・話し合いでメニューを決める
　味噌ラーメン、餃子、ロールケーキ、フルーツポンチ
・グループをつくる
・グループごとに食材と分量を考え、
　店に行って値段を調べ、予算を立てる
・作り方を調べ、計画表を作成する

❸ 8月25日

・買い物に行く
・調理する
・会食をする
・記録をつける、ふりかえりをする

参加者のコメント

「やかんの音はおもしろかった」

「店の名前も考えた。『ラーメン共育学園』っていうんだよ。ラーメン好き好き♪って歌ったよね。今度はチャーハン作りたいです」

「汁の量が難しかった。玉子とか足んないものは半分にしたりとか工夫した」

「働き過ぎて疲れました」
（皿洗いを一手に引き受けていた。ちょうどこの時期に職場体験で飲食店の洗い場を担当していた）

スタッフのコメント

店での下調べのとき、できるだけ安いネギを買おうと二人で協力して計算している姿がほほえましかった。翌日、下調べのときよりも安くなっていたので大喜びをしていた。

会話や作文もスムーズにこなす青年が、自由に選んでいい場面でなかなか決定できない意外な面が見られた。自己選択、自己決定の力が育っているのか、今後もみつめていきたい

応援スタッフのＴさんが生クリームを分離させてしまった失敗はおおいに盛り上がった。Ｔさんがスマホでその後のリカバリー方法を検索し、実際にバタークリーム完成につながる一連の流れを楽しむことができたのは、とてもいい光景だった。

現役大学生が参加していることで、青年たちの気持ちがぐっと上がったのが、わかりやすく見てとれた。

CLOSED 5

人間・性と生

≫≫ ねらい

いのち、こころ、からだについての基本的なちしきを身につける
他者を尊重した関係や、付き合い方をかんがえる

≫≫ テーマを決める時にかんがえたこと

しごとのための能力や技術は、「はたらくこと」に対する理解や性についてのねがい、なやみ、失敗などを相談したり、学ぶ機会がないため、知らなかったり、誤解した状態でいる人が多く、苦しみをかかえている。
そうした苦しみの結果、自分や他者を受け止めることがむずかしくなり、人間関係をきずくことをさまたげる原因となっているケースもある。

≫≫ 内 容

講師：日暮かをる
（“人間と性”教育研究協議会／障害児・者サークル）

❶ 11月24日

・自己紹介
・「性」という言葉からイメージするものを自由に出し合う
・性の多様性についてちしきを得る
・特別ゲストＲさん（トランスジェンダーの青年）の話を聞き、 話し合う

❷ 11月25日

・有志によるオープニングの出し物「ダンス」
・お悩み相談の手紙について、自分の経験を出し合いながらみんなで話し合う
・必要に応じて性器の名称や仕組み、いのちのはじまり、性行為、などの基礎ちしきを得る

《お悩み相談の手紙》
「気になる人にすぐセックスと言ってしまいます。
ぼくは変な人でしょうか？」
「ぼくは時々女の人に触ります。いけないことはわかっています。そんな自分に困っています。みんなはどうやっているんですか？」

❸ 12月16日

・オープニングの出し物「空手」「島唄」
・D・モリスの「ふれあいの12段階」の図をもとにして、出会い、告白、付き合い方、スキンシップなど、経験や感想、あこがれなどを自由に話し合う

参加者のコメント

「人との距離の置き方や、男女との交わりの持っていき方、性交とは何？といった点など、見て学ぶことができました」

「今日は学びの会で人間の色のことを学びました。とても勉強になりました」

「異性愛、同性愛、両性愛が学べてよかったです。今度は性的暴行対策を学びたいです」

「女性と男性のちがいを学べてよかったです。次回はしつこい男性から守る方法を教わりたいです」

「少し難しく考えすぎて、好きな人のことを昔にもどって考えてしまいました」

「性と生の勉強をして初めて聞いた言葉もあったので知れてよかったです。聞いたこともある言葉でも意味までは知らなかったこともあったのでよかったです」

スタッフのコメント

ボランティアの若い女性に触ったり「ぼくとセックスしましょう」というので問題視されている青年（24才）が参加。
最初は言葉に反応してニヤニヤしていたが、お悩み相談の内容には「ぼくと一緒だ！」「わかる～！」と共感し、徐々に真剣に聞くようになった。感想で「きょりかんについてまなんだ。だいぶあたまよくなった」と書いていた。

これまで「ぼくはバカだから恋愛しちゃいけません」「ぼくは女性も男性も誰も好きになりません。ア・セクシュアルかもしれません」「なんで子どもじゃないのに大人が手をつないで歩くのか理解できません」と言っていた参加者（40代）が、しだいにさまざまな経験を語りだした。
また「いのちの始まり」では、「愛し合って生まれるってそういうことなんだ！よかった、分かった！」と腑に落ちていた様子。
「これほど『性』について偏った禁欲的な考え方をしているとは思わなかった。生きていていいんだ、という肯定感が揺らいでいる。本人は生きづらかったのだろう」（元中学校の担任）

参加者が直球で経験談を話したり質問したりするのを見ていて、スタッフにとっても初めての経験であり、自分自身の学びになった。これが「一緒に学び合う」ことなのかと思った。

高校生から40代の社会人までが参加。初めて「性」の話を聞いた人から、風俗を利用している人まで経験も異なる参加者が、一緒に学ぶことの成果と課題の両方が見られた。
成果として、何を言っても受け止めてもらえるという安心感が共有できた、「性」を生きることは誰にとっても当たり前のことであると確認できた、様々な経験談や考え方がざっくばらんに出し合われた、これまでの思い込みや誤学習を解きほぐすきっかけになった。
いっぽうで、課題としてはやはり個々の課題に沿った内容と進度でのていねいな学び、今後の継続、個の悩みや願いの聞き取りなどがある。

OPEN 2

文化・教養❶ ～科学実験教室～

≫≫ねらい

おどろきや発見のあるじっけんを通して、しぜんげんしょうを理解し、身のまわりのことをみる視点をひろげる

≫≫内容

10月21日

大道仮説実験「モクモク」「水分子コースター」

講師：小沢洋一（あなたの社会福祉事務所～アゴラへ）

1）ドライアイスにいろいろな液体をいれ、反応をみる
　水よりお湯のほうがモクモクでてくる水蒸気がおおく、油ではでない。ジュースはシャーベットになって食べられる。
2）ドライアイスの粉で雲をつくる
3）かいせつをうけ、分子もけいをつくる
4）のこったドライアイスの粉をぜんぶ、大きななべのお湯にいれて、モクモクを大量発生させる

スタッフのコメント

5～74才まで幅広い参加があり、みんなが楽しんでいて、障がいの有無を感じる場面がなかった。

参加者のコメント

「最後のでかい実験でモクモクすぎて雲の国になっているのが、ちょうこうふん」

「子どもだけではなく大人もワクワクしました」

「クイズで進めて行くやり方、自分で予想するので参加している感じがすごくしました」

OPEN 2

文化・教養❷ ～韓国語教室～

1月13日

講師：朴恵貞（パクヘジョン韓国語教室）

OPEN 3

栄養と健康管理

❶ **10月6日**

「だれでもいつでもちゃんとごはん」

講師：練馬区健康推進課

❷ **12月9日**

「みんなで考えよう健康的な食生活」

講師：練馬区健康推進課

OPEN 5

地域活動・社会参加

❶ 9月23日
「選挙に行くってそういうことか！」
講師：練馬区選挙管理委員会

❷ 1月26日／❸ 2月2日
「ボランティアスタッフ体験」
講師：練馬区協働推進課＋
地域おこしプロジェクトメンバー

CLOSED 2

自主活動

❶ 11月3日
白雉祭（武蔵大学）

❷ 11月4日
夜芸祭（日本大学芸術学部）

OPEN 1

からだと表現

❶ 9月8日
「ゆるゆる体操」
講師：瀬戸嶋充（人間と演劇研究所）

❷ 12月23日
「はじけるリズム」
講師：大嶽實穂（打楽器奏者）

❸ 1月26日
「パントマイムでお話しよう」
講師：金子しんぺい
（パントマイムのお兄さん）

OPEN 4

防犯・防災

12月8日
「災害から守ろう大切な命」
講師：練馬区危機管理室防災学習センター

参加者のことば

自分が
自分じゃないみたいに、
とても変わりたくて
仕方ないんです。

他の人の得意なことを聞いて
おもしろかった。

え、クリリンや
ナガちゃんって、
学校の先生だったの？
学校の先生とあんなに笑って話したことがないから
ビックリ。

あ、ついでに
ぼくにお茶入れて
持ってきてください。

大学のようなところに
してほしい。

障害を持っていたら、
健常者より頑張らないと。
出来ないことが多いから、
障害者の自分は
毎日毎日頑張っています。

もっとうまくなりたい。
もっと字が読めるように
なりたい。

ぼくと
アズさんは
友達だもんね。

知的障がいをできない
ことを決めないで、
コツコツ努力をすること
を教えてくれました。

働き過ぎだから、
休んだ方がいいんじゃ
ないですか？

皆さん自己紹介
すごかったです。

今度は見る側ではなくて、
やる側になりたい。
音楽のステージやりたい。
ダンスもいいね。
（大学祭にて）

たいへんなことは
ひととのかんけいが
たいへんです。

個人的に
お悩み相談をしたい。

嘘をつけば頭を使わなく
てはならないから、あり
のまま話しています。

学校は適当、
学びの会は丁寧。

一人では行けないけど、
みんなと一緒だと大丈夫。
（大学祭にて）

話をして
落ち着きました。

仕事をしながらしょくばの人と
むりしてはたらくのはよくありません。
きちんと休みをとりましょう。がんばって仕事をすると自分に自信
がつきます※

※ことばとは裏腹で、実は自分ができて
反復しているようなケースもありま

いろいろはなせるようになろう。

いないことを他者から言われたことばを
した。

プログラム実施全体に関すること

- 目的にあわせた情報発信とその手段の検討
  公共施設にチラシをラック置きする方法では当事者に情報が届いていない
  障害者地域生活支援センターなどのプログラムとかぶっていて、どちらに参加しようかと迷っている姿があった
  →事前に他団体の実施スケジュールを入手することで対応
- 類似テーマを研究対象とする研究者との連携
- 取り組みに協力してもらいたい団体や関係機関との分野や地域の枠を越えたつながりづくり
- 個の語りの傾聴による理解と信頼関係づくりが当事者にとっての安心感につながることの大切さを改めて実感したが、
  そのための時間と人材の確保
- 外出時や緊急時のこともふくめ、臨機応変に対応できるようプログラムに柔軟性を持たせるために、
  スタッフやボランティア等の体制を整えることがひつよう

プログラムに関すること

参加者

- 企画当初から現在までは軽度知的障がい者を主な対象と設定しているが、今後対象を限定するか、拡大するのか
  （そのタイミング）をひきつづき検討するひつようあり。
  また拡大する場合のプログラムづくりは煩雑となることが予想される
- 生活介護サービス事業所や就労継続支援 B 型事業所に通所中の方の参加もあった。
- 中・重度知的障がいとされる方からもこうした機会を望む声があった
- OPEN プログラムへの一般参加者状況に、プログラム毎の差が大きくあった

プログラム

- タイトルはより事前理解ができるよう検討の余地あり
- 講師の考え方の偏りへの対処。
  「障がいがあっても努力すれば出来ないことなどない」という言葉をうけて、
  努力が足りないから出来ないと感じた人がいた
- 能力のあるなしといったことがあまり関係しないようなプログラムづくり

当事者

- 参加の意図やテーマの事前理解に関する検証のための情報が不足
  テーマに関する事前理解がどのくらいあったか、学びやテーマに限らず居場所的に参加した意図があったか不明 など
- 「生活」「ひとりぐらし」「しごと」など、言葉のイメージに大きく個人差がある
- 「しごと」のイメージが限定的。清掃系の仕事を連想する人が多い
- 年令や生活スタイル、生活圏などを考慮したプログラムテーマの選定が必要か
  普段の生活とプログラムのテーマや内容に差があるケースがある
  例）グループホームで生活するとき、自分で調理しないことが多いため、プログラムの参加に実感がともなわない

ワーキング グループ

成　　果 報　告　会

「わからない って言えるの がまっとうな 学びの場」

ワーキング
グループ

「高等部を卒業後も、もっといろんなことを学びたい。学校では教わらないこと、生活に直結したわからないことをじっくり学びたい」という意欲に応えるのはどのような場なのか、を話し合う会議です。

当事者性を大切にするいろいろな分野の専門家で議論を始めましたが、「まずはこの会議自体がインクルーシブに開かれてないとね」ということで、２回目以降は社会人から高校生までの当事者と、この議論に関心を持つ地元の人たちも交えて話を重ねてきました。

「施設で『テレビがうるさい』と言われた。どうしたらいいの」と訴える方、赤裸々な性の悩みを話し出す方もいれば、お金の管理やスマホの使い方を知りたい、みたいな話もたくさんでてきました。そんな中で「大学ってどういうところ？ 大学に行きたかった」という声があり、いろいろ話し合う中で、地域に開かれ誰でも参加できるゼミっぽい場が学びの宝庫になる予感があります。

当事業で実施してきた講座、例えば、お金について、働くことについて、性について、選挙について、他にも人間関係のつくり方・直し方って、通常学級や一般大学でも足りていない内容だとも気づき、教え教わるという形にこだわらず、司会も時々で変わり、時には知的障がいのある人が提供する側に回る授業の形があるんじゃないか、とか、今後に向けて夢は膨らみ中です。

ワーキンググループメンバー　一同

メンバー

坂本文武／一般社団法人 Medical Studio 代表理事、元立教大学 21 世紀社会デザイン研究科 特任准教授
森口弘美／京都府立大学公共政策学部福祉社会学科実習助教
田中真宏／NPO 法人ピープルデザイン研究所
片岡祐介／音楽家
鈴木一郎太／株式会社 大と小とレフ 取締役
栗林満／ NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会理事、元特別支援学校教員
大森梓／ NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会代表理事

第 2 回参加者

谷口晴子／企業就労中
百瀬賢太郎／企業就労中
鈴木康子／生活介護事業所通所中
豊島弥生／生活介護事業所通所中
永野佑子／NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会理事、元中学校特別支援学級教員
永田三枝子／ NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会理事、元小学校特別支援学級教員
石野哲朗／練馬区立障害者地域生活支援センターすてっぷ所長

第 3 回参加者

谷口晴子／企業就労中
百瀬賢太郎／企業就労中
飯嶋賢太郎／企業就労中
斉藤江梨／企業就労中
豊島弥生／生活介護事業所通所中
永野佑子／ NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会理事、元中学校特別支援学級教員
永田三枝子／ NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会理事、元小学校特別支援学級教員
森博俊／ NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会顧問、都留文科大学名誉教授
大場奈央／公益財団法人練馬区環境まちづくり公社みどりのまちづくりセンター
粕谷望／一般社団法人 medical studio

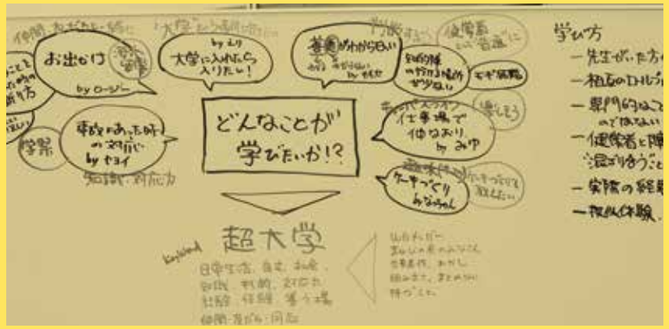
第 4 回参加者

谷口晴子／企業就労中
大森 駿／高校生
豊島弥生／生活介護事業所通所中
永野佑子／ NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会理事、元中学校特別支援学級教員
永田三枝子／ NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会理事、元小学校特別支援学級教員
宮原正量／練馬区地域・文化部協働推進課長
津田英二／神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授
笠原千絵／上智大学総合人間科学部社会福祉学科准教授
春口明朗／NPO 法人 Ohana 理事長
兼松忠雄／明治大学講師

成　　果
報　告　会

社会（地域・福祉・企業の連携システム）が支える、学校教育終了後から生涯にわたる継続的な学びの実践研究事業

～コミュニケーション経験を基盤とする
生活・就労支援プログラムの構築～



「こんな楽しいことやっているから、いろんな人に伝えたい！」と開催したところ、関係機関や保護者の皆さん、およそ 50 人に集まっていただけました。

高見さんから障がい者の生涯学習における課題といま国が取り組んでいることを、大森さんからは今年度講座の実施状況をスライドと映像で報告しました。

後半は、私たちが高揚感をもって模索している学びの場「超大学(仮)」を体感していただきました。

「大学に行って何を学びたいか」を入口のテーマとして“開講”しました。暴力や嫌な誘いの断り方や、善と悪の違い、結婚の意味を知りたいといった悩み事相談とも聞こえる会話から、彼らが考え続けたいテーマが見つかったり、想いもしなかった発想や発見をがあることを確信しました。

じっくり聞くこと、発言を待つこと、そして脱線を許すこと、話をまとめないことが、そんな学びがつまった議論のルールでは？との気づきをえて閉会しました。

本来よりはだいぶ短く 1 時間ほどの実施でしたが、会場の参加者からは「今日みたいな議論は何時間でも楽しく聞けるし面白い」との声が寄せられました。

概　要

日　　時：2019年 2月 26日(火) 14:00～16:30
会　　場：coconeri ホール　東京都練馬区練馬 1-17-1 ココネリ 3F
講　　演：「学校卒業後における障害者の学びの推進に関する取組状況と課題」
高見暁子
文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課 障害者学習支援推進室長
発　　表：「10 の講座実践と、
ワーキンググループから見えてきた新たな学び続ける場の可能性」
大森梓　NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会代表理事
予行実践：「当事者や多様な専門家を交えたディスカッション」
主　　催：NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会、練馬区

今 後 の 展 望

彼らの語りから見えてきた「学びの場」を考える上で大切な要素

- 「学び」という言葉から、学校の授業が思い浮かべられてしまう
- 知りたいことや、ひつようだと感じていることが、本人たちのなかにすでにある
- 実感がうまれ、考えるために、じっくりとした時間がひつよう
- ひとまえで話すことには勇気がともなう
- 大学へのあこがれは、仲間との時間のたのしさ、学びの両方がある
- わからないと感じた時に、「わからない」と言えるのはまっとうな学びの場
- 学びのなかみは人によってちがう

現段階で見えてきた「学びの場」にひつような要素

- 「教える人」「教えられる人」といった立場が固定化されない
- 多様な人とのディスカッション
- 待つこと
- 問いかけ方
- 「わからない」と言える
- 参加者ぜんいんが学びをえられる
- 自分から学びとる

今あるイメージにとらわれない新たな学びの場
「 超大学（仮）」

障がいの有無や立場に関わらず「学び」をえることができ、かわされるコミュニケーションの中に「学び」の気づきや発見を生じさせる新たな学びの場。

彼らがその場の雰囲気に左右されることなく発信・表現してくれることは、議論に深みを与えてくれます。それは障がいのある人がいるからこそ成り立つ場ではないかという見解がでてきました。また、参加者の誰もが学びをえられたことから、企業研修や大学の授業などとのれんけいが見込めるのではないかといった意見もありました。

プログラムのテーマは、本人たちの意見をとり入れやすいじょうたいを維持することで、人生、生活、就労のニーズをふまえた実践的なものを決めやすくなります。また、オープンなディスカッション形式と、彼らだけで考え、そうだんし、かみくだくことに十分に時間をとることができる形と併用することでの相乗効果も期待できます。

継続に関しては、すべてを一から新しくするのではなく、すでに数多くある地域での講座主催者と話し合い、障がい者にもとどくように既存講座をベースとしてアップデートする方法もあることがわかってきました。

また、障がい者雇用の促進が求められる昨今、企業とれんけいし、企業のニーズや要望と当事者のニーズをすり合わせながら学びの場をつくることがひつようだと考えます。たとえば企業担当者にとって「研修」のような参加しやすい位置づけとして理解される工夫など、参加する双方の立場にとって学びとなる仕組みづくりと伝達を探りたいと考えています。

コラム

「もっと知りたい！」から始まる学び

森博俊
都留文科大学名誉教授
福山市立大学非常勤講師

「学びの会」に来たいかと問われて、「学校で勉強してきてまた学ぶのは‥‥」と二の足を踏む障がい当事者の言葉が印象的でした。「学び」というのはしばしば学校の「勉強」とつながっており、強いられてする「お勉め」というイメージがつきまといます。いまの学校は「主体的に」生きる態度などの育成を目標にしており、「自立」のために必要な知識やスキルを身につけさせる指導が重視されています。社会に出るためには必要かもしれませんが、「学び」は「決められたもの」を習得するために「すべきこと」であり、当事者からはそれ自体の魅力が感じられなくなりがちです。

でもその一方で、「もっといろいろなことを知りたい」とか、困っていることについて「よくわかるようになりたい」という当事者ともたくさん出会ってきました。私は、この「知りたい」「わかりたい」と思う気持ち、何かに心ひかれ、のめり込んでいこうとする姿勢が、じつは学びの「はじめの一歩」だと考えています。

その「何か」は、好きなことやおもしろそうなことはもちろんですが、悲しかったこと、悔しいこと等々、自分の身に起こったさまざまな経験がきっかけになっています。「もっと知りたい」「もっとわかりたい」という姿勢こそ、学びの原点なのではないでしょうか。

このような学びの「はじめの一歩」は、私たちの毎日のくらしのなかにこそあります。山あり谷あり、どきどきするような経験ありのときに、あるいは、いろいろな人と出会い、意気投合したりちょっと違うなと思ったりするところに、それは隠されています。いろいろな時、いろいろな所で、ふっと心にわき上がってくるのです。たぶん、毎日毎日決まったことを、決められた通りに一人くり返しているような生活からは、こういう気持ちは芽生えにくいでしょう。「学び」は当事者が日常を生きるなかに、すでにはじまっているのです。

テレビやネットなどを通して流れる情報も、私たちの関心をそそり「もっと知りたい気持ち」をかきたてます。社会では、おびただしい消費文化が私たちの興味や関心を誘導しています。そして障がいのために孤立し、経験を制約されがちな当事者の生活は、しばしばこのような「お仕着せの仮想世界」にとざされています。大切なことは、情報にただ踊らされるのではなく、自分の身体を通して実感する種々の経験から立ち上がるような学びの原点を、日常の中に築いていくことだと思います。自分の身体でいろいろなことに触れ、友だちや地域にくらす様々な人たちと交わり、そこで感じたり考えたりする自分の内部の変化に耳をすます―そこからはじまる学びの一歩がいま求められているのではないでしょうか。

私たち人間は、その人なりの身体の感覚を手がかりにして、周りの人と関わり、世話をかけたり支えになったりしながら、様々な状況と相互交渉しつつ生存しています。家庭と職場・学校との往復が生活のすべてである場合の多い当事者を考えたとき、それらのあいだの時間や休日に、多様な経験のできる時空を創り出すことはできないでしょうか。そしてその拡張が「地域のふつうの暮らし」にならないかと思います。

学びの会の試みる「I-LDK」と「more time ねりま」は、こんな思いをもってはじまりました。そして、そのような地域の育ちと結びつき、当事者一人ひとりの生きる経験に根ざした学びを地道に創造したいと考えました。多様な人々のコミュニケーションの息づく地域の拠点である「I-LDK」の活動が経験を耕し、そのような地域での暮らしを土台にして新しい学びが芽吹くよう願っています。卒業後の当事者のための「more time ねりま」も、「I-LDK」活動を基盤に据えることにより、「自立」のあり方を多様に膨らませながら、学校卒業後の当事者が社会とつながり生き学ぶ場に育つと思います。

お わ り に

「学び」って、なんだろう。

この半年、彼らとかかわる中で、ずいぶんと自分の考えが変わったように思います。

なんだか、わかった風な自分の存在に気付かされることも多くあって、気恥ずかしい思いもしています。

プログラムの最中に撮影しながら、「学び」と出会った瞬間のみんなの生き生きとした表情がとても印象的でした。

「ふーん、そうなんだ」という知識や情報が、「あ、なるほど。こういうことか！」と、ふに落ちること。この瞬間の喜びは障がいの有無や年齢・性別などにかかわらず、誰にでも共通するものだと思います。

学校教育で育もうとしているチカラと、働くことを前提としたときに企業が求めているチカラには、どうやらギャップがありそうだということで、今年度はそれをつなぐ役割を果たす学びとなるようにテーマを設定し、プログラムを実施しました。

そのなかで、私自身も「学ぶ」ということの本質に触れ、また彼らとのかかわりから「学び」を得たように感じています。

「自分の人生がずっとこのままなのかと思うと、
とても怖くなります」

ある女のコからそんな相談を受けました。

彼女は高等部を卒業してすぐ企業に就労し、ちょうど１年になるころでした。３時間ほど二人きりで話していたなかで、彼女が「学ぶ」ということに自分の未来への可能性を重ね、多くの期待を寄せているような気がしました。

「高等部の頃にできなかったことができるようになりたい。新しい自分に生まれ変わりたい」

わたしたちと出会って、そんな風に考えるようになったそうです。

知らないことを知りたい。困っていることを解決したい。新しい自分に生まれ変わりたい。

彼らの学びのニーズは、今まさに生きている生活と人生に直結していて、学びを得た先の可能性は輝きを放ちながら無限に広がっているように感じています。

解決や目的達成ということよりも、人生の可能性が明るく開かれるというのが、「学び」のもたらす一番大切な成果ではないでしょうか。

一方で、わたし自身にとっての学びは、固定概念の打破という少し違った視点です。

すでにわかったつもりになっているけれど、実はわかった風になっているだけということに気付くという学びです。

見えないものにも目を向けて、
その存在の可能性を考え、探る。

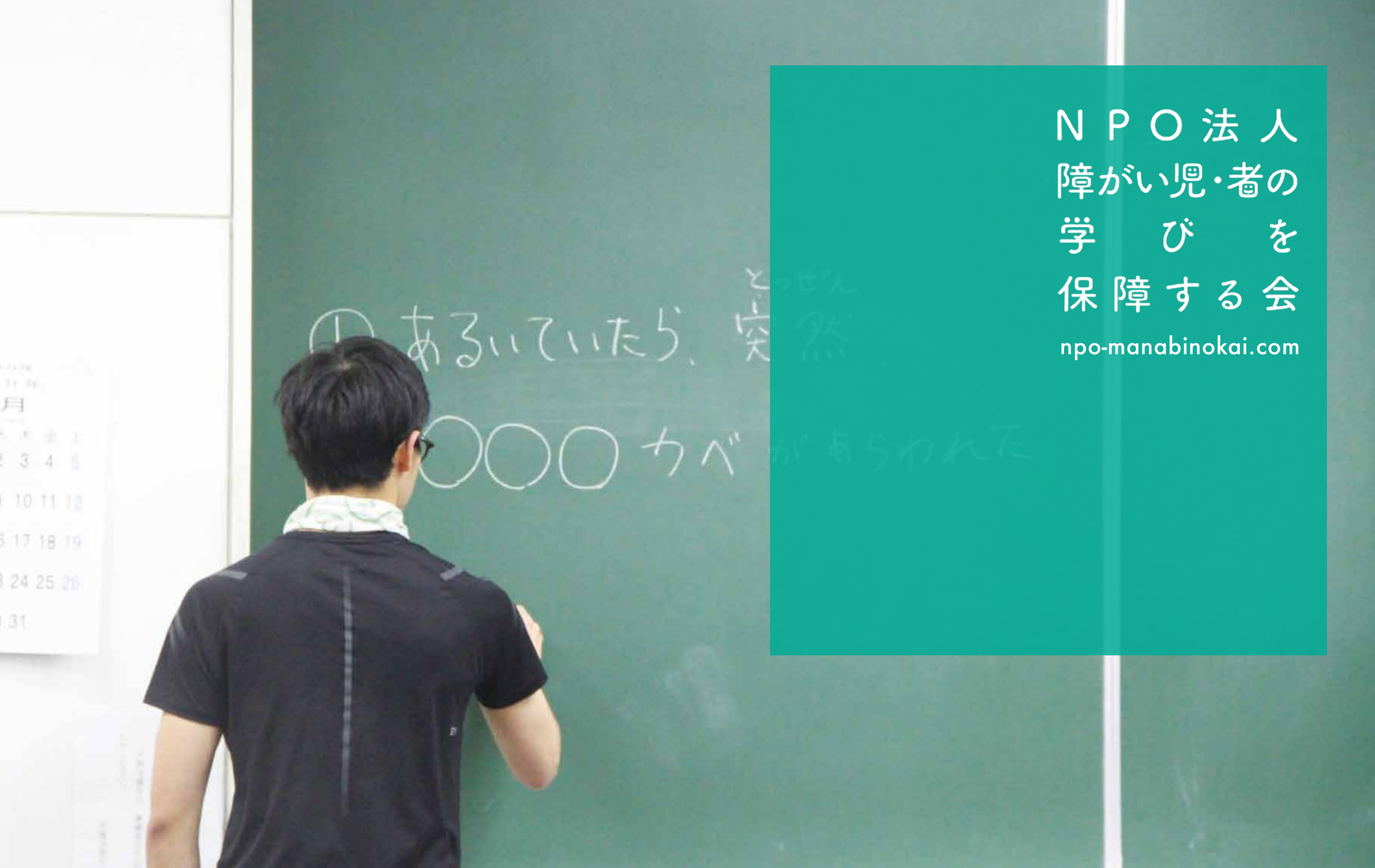
このためのきっかけを与えてくれるのが、ココロが揺れ動かされる彼らとの出会いであったように思います。いろいろな見え方、考え方、表現の仕方との出会いを通して、「ん？」「あれ？」「なんでだろう？」と自分のココロが揺れ動いたとき、見えていない新たな存在の可能性に気付くと同時に「わかっていない自分」の存在にも気付いていきました。

理解ができない方に原因がある。

とくに知的障がい者は、そんなふうに思われることが多いです。一方的に「彼らが学ぶ機会をつくっている」なんて奢って話していた自分を恥ずかしく思うとともに、こんな年になっても、まだまだ自分を成長させてくれる学びを与えてくれている彼らに感謝しています。

これからも　ぼくらのまなびは、つづく…

NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会
代表理事　**大森 梓**



NPO法人
障がい児・者の学びを保障する会

npo-manabinokai.com

代表の言葉

自分で言うのもなんですが、私は「代表らしくない代表」の代表ではないかと思います。（ややこしい）
古い親友が、「専業主婦が出世したものだな」と驚いていました。
ワーキンググループの坂本さんに初めてお会いした時、「大森さんは受援性が高いんですよ」と言われて、なるほど私にぴったりな言葉だなと思いました。
そんな私です。

私は、4人の子どもの母親です。しかも、全員男の子。でも当たり前ですが、誰一人として他の兄弟と同じように、そして育児書通りに育っている子はいません。
2歳から20歳まで、幅のある年齢層の子どもたち。彼ら一人ひとりとコミュニケーションをとることは、自分の日々の課題でもあり、成長の機会でもあります。毎日目を見張るような成長を遂げる彼らに、追い越せなくともなんとか追いつけるようにと奮闘する中で、私にもまだまだ伸びしろがある！なんて、自分が死ぬまで成長していけるようなそんな気がしています。

「大森さんち」という小さな社会でもある我が家は、「やれることをやれる人がやる」という役割分担で回っています。
いわゆる、お母さんだからご飯をつくる、とか、お父さんだから給料を稼ぐ、とかいう決め事はありません。親が子に諭されることもあるし、弟が兄を慰めることもあります。どこかで「いたいっ！」と声が聞こえれば、２歳の末っ子が救急箱からバンソウコウを出して手当します。家族のだれもが「みんなが楽しく暮らしていけるように」という思いの中で、それぞれの考えのもとに、それぞれが仕事をしています。いままで自分の仕事だった役割も、弟がその仕事ができるようになると、ゆずって別の仕事を見つけたりします。そうして、洗濯や食事づくりも子どもたちが担える役割になってきています。とりあいになって困ることが、たまに傷なくらいです。

そんな感じで子育てをしてきたのですが、一歩外に出ると、「できる」か「できない」かで、人の価値を線引きするような、そんなことが多い世の中だなと感じています。
「多様性の尊重」と言いながらも、みんなと一緒に同じことが「できる」ことこそ最も重要なこととされているようです。親は、その枠からはみ出ないように、子どものおしりをたたくことに必死にならなくてはなりません。そんなことにばかり気をとられてしまうと、一人ひとりが何をどのように感じて考えているかなんてことには寄り添う暇もなく、あわただしく時間が流れていってしまいます。

次男は、いわゆる「知的障がいがある」というくくりの中に入る子どもですが、そのくくりのなかで彼が生き、私が親として生きるとき、違和感を感じることがたくさんあります。
なかでも変だなと感じているのは、小さいころから「自立」という言葉が人生の目標として掲げられていること。でも、彼が生きる日常の中には、彼自身が自己決定できる時間も選択肢もほとんど与えられないことが多い。「支援」という名で、管理・コントロールされている状況下では、自立に向かっているどころか、逆行しているような感じさえしました。「自立するって、どういうこと？」という思いとともに、得体のしれない自立をめざすという、よくわからない状況がありました。
一方で、「自立」がその言葉の通り、彼が自分自身のチカラで立つということ意味するならば、そのために必要なものとはなんなのかとも考えてきました。彼が自分のチカラで自分なりに立ってみようと試みながら、転んでは起き上がり、たまには休んだりすることもできるような、そんな時間や機会なのではないかと、今わたしは考えています。同時に、たとえ彼のめざす「自立」が、わたしや他の人の考えるものと違っていても、彼が自分なりに自分のチカラで立っていると感じていることが何より大切なことだとも考えています。そして、そんな彼に共感し、ともに歩んでくれる仲間がいてくれたら最高だな～なんて思ったりもしています。

ということで、わたしの担う「代表」もこれと同じく、自分なりです。
理事仲間にも忘れられるくらいですが（笑）、自分らしくて とてもいいと思っています。

NPO法人障がい児・者の学びを保障する会
代表理事　大森 梓

理念／年表

理念

NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会は、様々な学びの機会づくりを通して、誰もが人との関わりのなかで、発達と学習ニーズに合わせて学べる教育を創造し、豊かな選択肢があり、自分らしく生きられる社会の実現をめざします

年表

2015

4	任意団体「ままのがっこ」設立
5～9	学習会 …「障がい児の『思春期』について」 「知的障がい児の『進路』について」
8	東京都内の特例子会社へのアンケート調査実施
11～12	学習会 …「特例子会社を見学しよう」 見学会 …「特例子会社「(株) レオパレススマイル」 「(株) アイエスエフネットハーモニー」 第 65 次 東京教研集会 障がい児教育分科会 青年期・高等部教育分散会にて自由研究発表

2016

3～4	見学会 … 就労継続支援事業所 「一般社団法人アイエスエフネットベネフィット(1)」
5	学習会 …「知的障がい児の『進路』について」 「障がい児の『障がい基礎年金』について」
7	東日本指導者研修交流大会 ― 福祉型専攻科・学びの作業所の交流会にて自由研究発表 「知的障がいを持った子どもたちの進路を考える ～特例子会社・保護者へのアンケート調査を通して～」
8～10	見学会 …「やすらぎの杜」、「やすらぎラウンジ」、 「練馬区立貫井福士工房」
9	講　演 …「中学卒業後の進路について」 （西東京市障がい児の自立を考える保護者の会／西東京市） 講　演 …「障がいのある子を地域で育てる」 （大泉障がい者地域支援センターさくら福祉カレッジ／練馬区）
12	講演 …「障がいのある人が豊かに生きるための学びを考える」

2017

2	見学会 … 茨城県つくば市内福祉型専攻科 「シャンティつくば」
6	学習会 …「障がい児の『障がい基礎年金』について」
10	「障がいのある子ども・青年の『性』と『生』を学ぼう」 学習会開催 （平成 29 年度練馬区やさしいまちづくり支援事業／練馬区）
11	NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会設立

2018

2	「ドラムサークル」実施 （練馬区地域おこしプロジェクト／練馬区）
4	ワークショップシリーズ「からみとつらなり」 （練馬区地域おこしプロジェクト／練馬区）
7	「障がい者の多様な学習活動を 総合的に支援するための実践研究」 （文部科学省） 学習会 …「特別支援学校高等部卒業後の進路を考える ～その後の人生を自分らしく生きるために～」 （平成 30 年度練馬区やさしいまちづくり支援事業／練馬区）

プロフィール

大森 梓　おおもり・あずさ　**代表理事**

子育て歴 20 年、男の子 4 人の母。大学生。支援教育専門士（F）。個性派揃いの子どもたちの育児を通して、彼らの生きづらさに象徴される様々な社会的課題に直面する。任意団体「ままのがっこ」を立上げ、親が子どもそれぞれの課題について学ぶ場をつくる活動を始める。その後、教員ＯＧ／ＯＢらとＮＰＯ法人を設立。多様な人と関わり合うことで自分が成長してきたことの経験から、誰にでもその機会が必要であると考え、固定概念に捉われない様々な学びの場をつくる活動を目指す。『気付いた人の責任』がモットー。

永野佑子　ながの・ゆうこ　**理事**

元公立中学校特別支援学級教員。“人間と性”教育研究協議会（性教協）障がい児・者サークル世話人。全障研会員。障がいのある若者たちは、色んな悩みを言葉に表せないまま年を経ていると思います。言いたいことを言い、やりたいことを見つける人生のサポートをします。人生いつでも学び直しができます。

栗林 満　くりばやし・みつる　**理事**

元都立特別支援学校教員（30 年）。定年退職後、生活訓練事業所（福祉型専攻科）所長職及び非常勤職員（4 年）。日本社会事業大学専門職大学院（専門職修士）。社会福祉士、相談支援専門員。障がいのある青年たちと自分の人生を重ね合わせて、「学びの場」「居場所づくり」の活動をしている。余暇＆生き甲斐＆平和を願い、演奏活動（フォルクローレ）を 20 余年続けている。

朝生賀子　あさお・かこ　**理事**

小学 3 年生のとき、自閉症の女の子と仲良くなり、彼女の世界との関わり方に惹かれました。彼女はわたしに見えない何かを見ている。わたしは彼女が見るように世界を見てみたくて、いつも彼女の傍にいました。今も変わらずそう思い、「学びの会」に参加しています。いっしょに愉快にすごしましょうね。

永田三枝子　ながた・みえこ　**理事**

元公立小学校特別支援学級教員。“人間と性”教育研究協議会障がい児・者サークル世話人。臨床教育学会会員。社会福祉法人青年学級講師。
子ども・青年・成人たちの悩みや願いを聞くこと、一緒に学んだり遊んだりすることが大好きです。「だいじょうぶ！」が好きな言葉です。

森 博俊　もり・ひろとし　**顧問**

障碍とともに生きる知的障碍当事者の人生の語りを聴きとりながら、その経験の意味を考え、教育実践にいかしていく研究や実践をしています。日本臨床教育学会の会員で（元理事・機関誌編集委員長）、専門領域は「知的障碍教育論・臨床教育学」です。現在、福山市立大学非常勤講師、都留文科大学名誉教授。

文部科学省平成 30 年度
「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

社会（地域・福祉・企業の連携システム）が支える、学校教育終了後から生涯にわたる継続的な学びの実践研究事業 ～コミュニケーション経験を基盤とする生活・就労支援プログラムの構築～ 報告書

超 cho-

発行日：平成 31 年 3 月 10 日
発 行：NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会
代表理事：大森 梓
住 所：東京都練馬区土支田 3-20-2
Email：hello@npo-manabinokai.com
URL：https://npo-manabinokai.com/

編 集：鈴木一郎太（株式会社大と小とレフ）
デザイン：ウエダトモミ（BOB. des'）

Cho-